

Journal of Occupational Science, Volume 12, 2005 日本語ガイド

A Model of Occupational Presence

Reid, Denise

(No 2, pp 110-113)

「作業的存在感モデル」

存在感 (presence) とは、そこにいる (being there) という意識である。作業的存在感モデルでは、つながり、相互交流、注意、感覚刺激、現実味、探索、予測、ドラマ性、関わり、を要素として、作業的存在感が生じ、喜び、モチベーション、満足、セルフエフィカシーをもたらす。

Becoming a Mother: Occupational Change in First Time Motherhood

Horne, Jane and Corr, Susan and Earle, Sarah

(No 3, pp 176-183)

「母になること:初めての母親業における作業変化」

第一子をもってから2年半経った6名の母親(28~42歳)に興味チェックリスト、役割チェックリスト、インタビューを行った。母親業に適応する前には、以前のライフスタイル(セルフケア、レジャー、生産活動、休息のバランス)を行い、作業混乱を経験していた。母親業は、生産活動優位で義務優位だった。

Being as doing: occupational perspectives of women Survivors of hemorrhagic stroke

Stone, Sharon Dale

(No 1, pp 17-25)

「行いとしての存在:脳出血後の女性の作業的視点」

17~49歳で脳出血を発症し、現在23~57歳の女性23名にインタビューした。発症後の経験について聞き、何があったか、障害者としてみられたか、自己イメージ他者との関係、脳出血の意味を聞いた。結果として、発症が仕事や生活の優先順位を考え直す機会になった。新しい優先順位ができた。心配しない、新しい自分を創るというテーマがあがった。参加者の発言をもとに、行い (doing) の形 (form) としての存在 (being) の重要性に注目する必要があると思われる。

Cooking Up Christmas in Kentucky: Occupation and Tradition in the Stream of Time

Shordike, Anne and Pierce, Doris

(No 3, pp 140-148)

「ケンタッキーのクリスマス料理:時の流れの中の作業と伝統」

65歳以上のケンタッキーに住む女性23名に、クリスマスの料理について、フォーカスグループインタビューを行った。食事作業、女系の伝承(家族、文化的役割)、適応能力(物理的、時間的、情緒的な華麗、家族、文化的変化に対する)の間の複雑な相互関係が明らかになった。この研究は、オーストラリア、ニュージーランド、タイとの共同研究の一部である。

Going for Gold: Understanding Occupational Engagement in Elite- Level Wheelchair Basketball Athletes

Garci, T C Hull and Mandich, Angie

(No 3, pp 170-175)

「金メダルに向かって:車いすバスケのエリート選手の作業への取り組みの理解」

カナダナショナルチームの男性 10 名, 女性 6 名にインタビューした。脊髄下位損傷で車いすバスケの選手である彼らは, 多大な個人的, 財政的負担をしながらも挑戦を続けている。分析から生まれたテーマは, ①試合を愛す (金メダルへ, 障害を乗り越え, 専心し, 挑戦する), ②団結心 (チームは家族, 喜び, 友情), ③柵をはずせ (スポーツとして, アスリートとして認められる)。本研究からスポーツの重要性を理解できた。

Meaningfulness of Occupations as an Occupational-Life-Trajectory Attractor

Ikiugu, Moses N

(No 2, pp 102-109)

「作業的人生軌道のアトラクター(誘引力)としての作業の意義性」

直線的因果関係理論よりカオスや複雑系理論の方が, 作業科学には適している。作業的人生軌道を構成するものとして, 作業の意義性に注目した。文献から意義性について述べられていることを整理した。意味 (meaning) とは, 言おうとすること, 人生の目的, 重要性を指し, 意義性 (meaningfulness) は, 実在的意味, 人生に意味と目的を作り出すことを指す。作業科学文献では, Trombly (1995), Clark (1991) を調べた。意義性の性質は, ①個別性と特異性, ②アイデンティティと切り離すことができない, ③健康感 (sense of well-being) の強化, ④過去, 現在, 未来を全体として人生を理解することが必要, である。作業的人生軌道のアトラクターとしての意義性は, 楽しむ力, 手段, 他社によって与えられる価値, 作業による達成感, 治療的作業と関連する。

Model of processes transforming occupations: exploring societal and social influences

Humphry, Ruth

(No 1, pp 36-43)

「作業変形プロセスの理論:社会と人への影響」

どのように作業が遂行され経験されるかという作業の変化プロセスの概念モデルを説明する。①地域はどのように作業の機会を作り出し, 発達をサポートするか, ②ダイナミックな人々の交流と協働が変化にどう貢献するか, ③個人が佐合に取り組むプロセスはどのように組織化されるか, 子どもと教師の例で説明する。

Occupational adaptation: perspectives of people with traumatic brain injury

Klinger, Lisa

(No 1, pp. 9-16)

「作業適応:頭部外傷者の視点」

頭部外傷受傷から 2~7 年経った 7 名にインタビューした。29~45 歳で 6 名が男性だった。受傷後にアイデンティティ変化を経験していて, これが作業適応に影響を与えていた。アイデンティティと作業は密接に結びついていた。新たな自分が作業適応の基盤になっていた。自己アイデンティティの作り直しがリハビリテーションの重要な側面だった。これまで頭部外傷のリハビリテーションでアイデンティティが語られたことは滅多にない。

Occupational development: towards an understanding of children's doing

Wiseman, Jennifer O and Davis, Jane A and Polatajko, Helene J

(No 1, pp 26-35)

「作業的発達:子どものすることの理解に向けて」

子どもの発達について多くの研究があるが、子どもの作業がどう発達するかについてはほとんど知られていない。6~12歳の女兒8名と6名の親にインタビューした。その結果作業の理由とプロセスという2テーマが浮上した。これを基に「子どもの作業確立プロセス」というモデルを考えた。「そこにある」また「そそられる」ことに対して「始める」か「始めない」かがあり、始めた場合には「止める」か「続けるか」となる。止めても「また始める」こともある。続ける場合には「変える」か止めるかである。続けたり変えたりした時に「成果」がある。子どもの作業を支えるのは「親の見解や価値観」, 「資源」, 「モチベーション」, 「機会」である。

Occupational Profile: An Interview with Judy Varner

Furman, Michelle and Mueller, Jill

(No 3, pp 189-190)

「作業プロフィール:Judy Varner」

リハビリテーション助手のJudy。

Occupational Profile: An interview with Lou Klauser

Wicks, Alison

(No 1, pp 44-50)

「作業プロフィール:Lou Klauser」

製本業者のLouはドイツ生まれ。修道院で製本業と出会い親友を追ってカナダへ行く。クリスマスカードの大量生産やウェディングアルバム作りの仕事を経て、婚約者の故郷であるオーストラリアでオールブック製本所を開業。36年間仕事を続け、学生の論文の製本をしている。学生にとっての「初めての本、世界で一つだけのもの」を作り続けている。

Occupational Profile: An Interview with Rebecca Hoffberger

Yeager, Jenna

(No 3, pp 184-188)

「作業プロフィール:Rebecca Hoffberger」

American Visionary Art Museumを1995年に創設したRebecca。

Occupational Terminology

Lentin, Primrose

(No 3, pp 191-194)

「作業の用語:Act, Action, Active, Agency, Doing」

活動(activity)に関連する用語間の関係。

Occupational Terminology Interactive Dialogue

Lentin, Primrose

(No 1, pp 51-53)

「作業の用語:活動(Activity)」

活動(activity)がつく言葉と概念, 意味のある活動(meaningful activity), 目的活動(purposeful activity) 活動概念(activity idea), 活動選択(activity choices)。

Occupations and Identity in the Life of a Primary Caregiving Father

Segal, Ruth

(No 2, pp 82-90)

「介護を行う父親の人生における作業とアイデンティティ」

14歳と13歳の筋ジストロフィーの息子をもつ父親(主夫)にインタビューを行い、作業とアイデンティティの関係を調べた。その父親は、直接的ケアよりもアドボカシーに焦点を当てていく。他機関や施設との関係をとることで、外の世界と関わっていた。これが父親のアイデンティティの一貫性を維持していた。新しい作業はアイデンティティを脅かすかもしれないが、アイデンティティを継続させる作用もある。

Occupations of Masculinity: Producing Gender through What Men Do and Don't Do

Beagan, Brenda and Saunders, Shelley

(No 3, pp 161-169)

「男性の作業: 男がすること, しないことからジェンダーが作られる」

カナダの11名若い男性にインタビューした。男らしくなるために、運動やウェイトトレーニングを行い、「正しい食事」に努力していた。異性の好み、仲間からの尊敬、一般受けすることという意味があった。男らしさを見せるという意味はなかった。他の人の身体と比べたり、男らしく話せたかを気にしたり、外見に気を使っていることを隠したりもしていた。

The Meaning of Everyday Meals in Living Units for Older People

Bundgaard, Karen Marie

(No 2, pp 91-101)

「高齢者のユニットケア施設での毎日の食事の意味」

虚弱高齢者は日欧の活動が自分ではできなくなっていくが、食事関連の活動には様々な意味を経験することができ、これが生活の質につながる。デンマークのユニットケアの高齢者施設の1ユニットの7名中5名にインタビューし、観察した。食事の仕方は、一日のすべての活動に影響を与えていた。食事の仕方により、家らしさが生まれ、地域で暮らすということになり、一般的な生活になっていた。食事は日常に時間と空間を与え、ユニット生活の中心といえた。

The Occupation of Household Financial Management among Lesbian Couples

Bailey, Diana and Jackson, Jeanne

(No 2, pp 57-68)

「レズビアンカップルにおける家庭内経済管理作業」

13組のカップルにインタビューし、修正版グラウンデッドセオリーとナラティブアプローチを使って分析した。お金の管理の仕方はカップル二人が同等で、経済管理は二人の関係や時期により流動的だった。お金の管理は、今日社会のレズビアンという立場に影響を受けていた。家事労働の分配の再定義、公正とバランスの概念、報酬のある仕事とない仕事について考えることができる。

Time Use Following a Severe Traumatic Brain Injury

Winkler, Dianne and Unsworth, Carolyn and Sloan, Sue

(No 2, pp 69-81)

「重度頭部外傷の後の時間利用」

頭部外傷後3年以上経過した37名を対象に時間利用を調査した。同年代と比較すると就労時間が少なく、パーソナルケアにかかる時間が多かった。一人で過ごすことが多く、家族と過ごすことが少なくなかった。地域にはいるが、他の人と一緒に作業することは少なかった。頭部外傷の後、意味のある作業が減っていた。調査者はオーストラリア統計局のものを使用し、活動、場所、一緒にいる人、誰のための活動か、について、週日と週末で調べた。

Toward Developing New Occupational Science Measures: An Example from Dementia Care Research

Wood, Wendy

(No 3, pp 121-129)

「新たな作業科学測定法開発に向けて: 認知症研究から」

直接観察による量的評価法として、ACT (Activity in Context and Time) を開発した。ACTは、QOLにおける環境との関わりと時間利用を評価する方法である。環境は、活動・社会的・物理的状況について評価し、時間利用は、視覚的行動、機能的移動、会話、活動参加、問題行動を評価する。QOLは感情面で関心の有無を評価する。施設入所している認知症者のデータから、理論、ACTの長所と限界について述べる。

Understanding Occupational Potential

Wicks, Alison

(No 3, pp 130-139)

「作業的潜在能力の理解」

65歳い女王の女性に新聞広告で研究協力を依頼し、フォーカスグループとインタビューを行った。今回は3名のライフストーリーを分析した。作業的潜在能力は複雑で、時と共に育成される。その結果、個人は唯一無二の存在となる。環境と個人要因が影響を与えていた。

Understanding Political Influences on Occupational Possibilities: An Analysis of Newspaper Constructions of Retirement

Laliberte-Rudman, Deborah

(No 3, pp 149-160)

「作業の可能性に関する潜在的影響の理解: 退職に関する新聞記事からの分析」

カナダの新聞の退職に関する138記事を分析した。記事から読み取れる理想は、生産者であり、消費者であること、年金に頼らないこと、自由裁量権をもつことだった。退職は作業的不公正 (injustice) だといえる。これは作業科学への挑戦である。

Workplace Culture, Folklore, and Adaptation

Farrow, Jane

(No 1, pp 4-8)

「職場文化, 民俗, 適応」

職場には特有の文化があり、物語がありヒーローがいる。(職場のコンピュータでゲームをしている上司のゲームソフトをこっそり削除、後になって気づいた時の上司の顔・・・) 職場のゴシップの7つの特徴は、①集めて撒く、②仲間うちで、③一味足す、④旬のうちに、⑤迅速に、⑥明るく、⑦ネタ元はばらさない、である。きつい仕事でも、手に入れた夢の仕事なら、職場文化を読み解き適応することができる。